

経営と暮らしのあらがると

災害対策

第6回 災害対策に家族全員で取り組んでいますか？

今回は、場所に縛られない「IT環境を準備する「危機管理型クラウド」についてまとめました。今回は、両親、配偶者、お子様など大切なご家族をめぐる災害対策について、2歳の息子を持つ父親でもある筆者の実例も交えながら、災害への準備のポイントをお届けします。

ハザードマップの活用

読者の皆さまは、ご自宅の立地について、災害リスクの高さを十分に把握していらっしゃいますか？

筆者自身の話になりますが、以前はメンテナンスコストや鉄筋コンクリート造りの耐震面での安心感からマンションの賃貸住宅に住んでいましたが、息子をのびのび育てるために、あるとき都内の一戸建て購入に踏み切りました。

一生に一度の大きな買い物となる一戸建て購入を前に、筆者はまず、各自治体が無料で公開している「ハザードマップ」を手に入れました。ハザードマップはさまざまな災害リスクを地図上に示したものです。例えば東京都港区にお住まいの方であれば、インターネット検索で「港区 ハザードマップ」と検索すると、港区が調査した災害リスク予想を基に地域ごとを色分けなどで表示したハザードマップを誰でもご覧頂けます。これを見て、地盤の頑丈さ、風水害でのリスク、木造住宅密集による

火災延焼リスクなどを調査しました。

さらに、購入候補の物件の実地チェックをする際に、周辺地域の防災力と治安（消防署や交番などが近くにあるか）などをいろいろ下調べしました。

そうした予備知識を踏まえて、地盤が強く各種災害リスクが低く、また息子が通いやすく、危機時は避難所にもなる小学校の斜め向かいの物件を購入することにしました。おかげで現在も、ゲリラ豪雨や地震などの際にも安心して仕事や育児に取り組んでいます。

「お散歩防災」のススメ

災害対策では、机上の空論ではなく、実際の現場や現物の実態に即して対応することが極めて重要です。「多分これで問題ないはずだ」という思い込みだけでは、いざ災害が起きたときに想定外の事態に直面し、大きな危険を招きかねません。

そこで筆者は、家族で一緒に取り組める災害対策として、近所を家族で歩いて回る「お散歩防災」を提案しています。災害時には通常は通れる道でもブロック塀などが倒壊して通れないといったこともあり得ます。どれだけ詳細な周辺地図があつてもそれだけに頼らず、実際に自分で歩いてチェックすることで、地図にない地域社会での災害時に役立つ情報を得られるわけです。

実際に、筆者も自宅周辺を家族で散歩しながら災害時に役立つような情報を得ています。近所のお宅が「防災井戸」を設置されていて、災害時にはそのお宅で水を供給して頂けるという、公的な地図では分からない情報を得たり、緊急時の迂回経路を把握したりできて安心です。

また、避難所となる学校などの拠点まで実際に家族で歩いて行ってみることで、大人の足だけでなく子ども連れの移動にかかる時間なども把握できます。

育児・介護に必要な備蓄品

家庭の災害対策では、職場での災害対策と異なる備蓄品目が必要となることに注意しましょう。お子様や要介護者の方などがいらっしゃるご家庭では、乳児には粉ミルクや哺乳瓶、幼児や介護・介助が必要な方には紙おむつの備蓄が必要になってきます。筆者は、移動手段としての自転車が発災時にがれきなどでタイヤがパンクして使えなくなる可能性を考慮し、タイヤに釘が刺さっても走れる「リペアムゲル」を注入して「ノーパンク自転車」を備えています。

その他、職場とは異なるさまざまな備蓄品が必要になりますので、「こんな時はどうする」「こんな時は何が必要か」について、家族で災害対策について話し合われることをお勧めします。

(つづく)



日本マネジメント総合研究所合同会社 理事長 戸村 智恵